

踏まえて一定の限界利益が確保出来るかどうかを見極めた上で再稼働させるかどうかの判断を行う。

Q グループ会社の上期損益が従来予想に比べて上振れした理由を教えてください。

A 電炉系については、建築関連需要が上期はあまり落ちなかったこと等により上振れした。また、グループ会社は経営環境が悪化する中、総じて保守的な見通しであったことも1つの要因。

Q 2020年度下期の実力損益525億円について、下振れ要因があれば教えてください。

A 3Qから年明けまでは出荷数量も価格も見えており、4Qについてはやや保守的に見ている。グループ会社も基本的には保守的に見ているし、海外グループ会社は12月決算会社が多いのでほぼ見えている。コロナ第三波のようなことがなければ、下振れ要因は小さい。

Q 2021年度の連結事業利益を予想する際に、2020年下期実力損益×2の年率1,000億円をベースに考える場合、その他に考慮すべき事項はあるか？

A 最大のポイントは需要がどれだけ戻ってくるかにある。2020年度下期の数量はコロナ前に比べてまだ低いが、今後もコロナ前の水準にまでは回復しない可能性が高いと見ている。どの程度需要が回復し、生産出荷が増えるかの見極めが重要。また市況分野のマーゼンの想定は難しいが紐付き価格の改善には継続して取り組んでいく。4Qの原料単価が上昇すると予想しているが、紐付き価格への反映は期ずれを起こすため、その影響も考慮する必要がある。コスト面では、今後の生産設備構造対策の効果として累計1,000億円、このうち2020年度では350億円が発現すると見込んでいるが、残りの効果のうち来年度にどの程度発現させていけるか。また、ベースコスト改善もしっかりと行っていく。なお、今期は臨時休業等の緊急対策を実施しているが、数量が回復した際にはこうした効果が減少し固定費が増加する半面、変動費の減産デメリットは改善するので影響は相殺される。

Q シームレスパイプの需要が落ちこむということだが、詳細を教えてください。

A シームレスパイプ全体として、当初想定よりも需要が落ち込んでいる。シームレスパイプの損益はハイエンド品に依存しているが、ハイエンド品についても、全体の落ち込み幅ほどではないが数量減が見られ、価格も若干下落している。もともとハイエンド品の受注は確保出来ていたが、プロジェクトの延期・キャンセル依頼が出てきており、これを受けて量が落ち込むと見ている。

Q コロナ影響で鋼材需要の長期見通しに変化したと思うが、減損の兆候はなかったのか？

A 今年度は減損の兆候はない。

- Q 今回の一連の電磁鋼板の投資の採算性は？また、変圧器用、EV モーター用それぞれのシェアはこの投資によりどう変わるのか？他社との技術格差は？**
- A 今回の投資採算性は当社の基準を満たしたものとなっており、非常に良い投資だと思っている。需要規模は想定以上に伸びており、これをカバーする投資となっている。シェアについては申し上げられないが、スーパーハイエンド品はお客様と協働し、シェアとしては非常に高い。いかに薄手で加工性がよく、磁性が優れているかという、両立困難な課題を全て両立させているという点で当社は技術的にもトップレベルにあると認識している。そしてさらに先に行くために1,000億円規模の投資を決定・実行している。
- Q 米国 AM/NS Calvert の電炉の取り組みに関連し、電炉でのハイテン製造について、どの程度技術的に確立しているのか？**
- A 広畑でも電炉で高級鋼を作る計画であり、基本的には不純物の少ないスクラップが調達できれば可能だと考えている。製造プロセスは地域毎に考えていく必要がある。米国は、安価な電力コストや豊富な冷鉄源があること等から電炉比率が高い。インドで行っているMIDREX、COREXも含め様々な知見を蓄積し、グローバル事業戦略における新たな選択肢を増やしていきたい。
- Q 米国 I/N Tek, Kote について、パートナーが ArcelorMittal から Cleveland-Cliffs に変わる形になるが、これらの事業の持ち分はどのようにするのか？**
- A I/N Tek, Kote の件については関係先と関わる事項であり、現時点ではお答えできない。

以 上

本資料は、金融商品取引法上のディスクロージャー資料でなく、その情報の正確性、完全性を保証するものではありません。また、本資料に記載された将来の予測等は、説明会の時点で入手可能な情報に基づき当社が判断したものであり、不確定要素を含んでおります。従いまして、本資料のみに依拠して投資判断されますことはお控えくださいますようお願い致します。本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。